

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

MCCALLUM Derrace Garfield

論文題目

Negotiating Care Across Borders & Generations: An Analysis of Care Circulation in Filipino Transnational Families in the Chubu Region of Japan

(国境と世代を超えたケア・ネゴシエーション：日本の中部地方におけるフィリピン系トランスナショナル家族のケア・サーキュレーションに係る分析)

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	伊東	早苗
委員	名古屋大学	教授	東村	岳史
委員	名古屋大学	准教授	日下	渉

論文審査の結果の要旨

1. 論文の概要と構成

本博士論文は、中部地方に居住するフィリピン系トランスナショナル家族（物理的な国境を越えたネットワークとして存在する家族）の生活体験を日本とフィリピンの両国にまたがる調査を通じて分析し、国境をまたがる家族内の「ケア」（物理的、経済的、感情的、道徳的な保護や思いやり）が、誰により、どのような形をとって担われ、トランスナショナル家族の絆が強化されているかを描き出すものである。調査の手法は質的なインタビューと参与観察を中心とする事例研究である。トランスナショナリズムの理論的枠組みに依拠しながら、「家族」、「移民」、「ケア」に関わるグローバルな議論を検証し、独自の分析を試みている。家事労働者による開発途上国から先進国への出稼ぎ労働により、ケアの循環がグローバルな不平等分配を生み出しているという先行研究の議論を再検討し、国境をまたがるトランスナショナル家族において、様々な構成員が従来見過ごされてきたケアの役割を自律的に担い、国境を越えたケアの循環を生み出すことで、家族としての新しいアイデンティティを創出していると議論する。

本論文は全7章からなる。第1章は研究課題及びその背景や意義を説明し、本論文の構成を説明する章である。第2章は、本論文が依拠するトランスナショナリズムと移民に関する理論の動向をレビューする章である。とりわけ、トランスナショナルな母性、父性、幼年性に関する先行研究の理論を読み解き、「グローバル・ケア・チェーン」等、「ケア」に関わるグローバルな議論との接合を試みる。第3章は、中部地方に住むフィリピン系トランスナショナル家族を対象とする自身の調査データに基づいて、ケアを担う役割を8類型 (Dependent Child, Resourceful Adolescent Child, Sacrificial Mother, Breadwinner Father, Nurturing Father, Caring Adult Child, Dependable Grandparent, Supportive Kin) に分けてそれぞれ分析する章である。伝統的なケアの担い手である母親が物理的に不在な中、残された父親、子供、祖母、親戚が、伝統的役割のステレオタイプにとらわれない新しいケアの担い手として、家族のネットワークを創出する様を描き出す。第4章は、フィリピン人移民が祖国で待つ家族に送るギフト (balikbayan boxes) をフィリピンに根強い贈与の文化と関係づけて分析し、こうしたギフトが物理的・経済的な意味を超えた愛情の証であり、家族の紐帯や互惠性の表象であると議論する。第5章は、SNSの普及により、現代のトランスナショナル家族がテクノロジーを介して空間の制約を乗り越え、どのような時間軸でケアを与え、親密度を維持しているかを描き出す章である。第6章は、トランスナショナル家族内における相互ケアの問題を超え、フィリピン国家が移民労働者送り出しをどのような政治的言説として語り、トランスナショナル家族はこうした言説にどのように対応しているかを議論する章である。フィリピン政府が移民による国家への経済的奉仕 (すなわち「ケア」) を愛国心と結びつけて鼓舞する中、移民は現金を送る以外に、社会的な資源を国境を越えて送り届けている (すなわち social remittance) と議論する。同時に、フィリピン国家という家族の長は、国家が送り

論文審査の結果の要旨

出す移民労働者とそのトランスナショナル家族に対し、社会福祉と社会的保護を届けるべき責任があると議論する。最終章である第7章は、本博士論文の中心的議論を総括し、先行研究と照らした上での独自の貢献を明らかにする章である。本研究の第3章で論じられる内容は、1本の査読付き学術論文として刊行されている。

2. 評価

本研究は移民研究として、以下の点が評価に値する。

1) 従来の移民研究におけるトランスナショナルな家族の様態に焦点を当てた研究は、それら家族が居住する地理的場所に制約されたものが多く、国境を越えた二地点にまたがるネットワークとしてのトランスナショナルな家族を分析対象とする研究は少ない。とりわけ、北米やヨーロッパをホスト国とするトランスナショナル家族の研究が多く、アジア地域内の家族ネットワークを分析対象とした研究は数が少ない。また、トランスナショナルな家族ネットワークの中の、子供、父親、母親、その他家族構成員を別々の研究対象としてとらえる研究が主体であり、家族全体を分析対象とする包括的なアプローチは少ない。これらの点から判断し、本研究の方法論には高い独自性があると判断できる。

2) 在日フィリピン系家族に関する従来の研究は、国境により家族が分断され、苦境にあえぐ当事者を描き出すものが多かった。本研究は、在日フィリピン系家族がトランスナショナルな家族のネットワークを国境を越えて自律的に紡ぎ出し、個々人がエージェンシー(Agency)を発揮している様を、トランスナショナル家族の様態として前向きに描き出した。

同時に、本研究は以下のような不十分な点も含んでいる。

1) 本研究は、中部地方におけるトランスナショナル家族の生活世界をプラスの側面で描き出した一方、こうした家族のネットワークを維持できず、崩壊していく家族の事例については分析が不足している。どのような条件を整えば、フィリピン系移民がトランスナショナル家族を成立させることができ、どのような状況下ではそれができないのかを、社会階層の分析と絡めて検討する余地がある。

2) 本研究は、フィリピン系トランスナショナル家族の構成員ひとりひとりのエージェンシー(Agency)を生き生きと描き出した一方で、より構造的に、日本、フィリピン両政府がこうした人々に対してどのような責任を負うのかについての分析をより深める余地がある。

論文審査の結果の要旨

3) 家族内でケアを担う役割の8類型については、これ以外の他の類型の考え方もあり得ると思われ、8類型がどのような必然性をもって同定されているかについて、今後も検討を深める余地がある。

しかし、これらの点は、論文著者が今後の移民研究において取り組むべき将来の課題であり、本論文の価値や独自性を損ねるものではない。本論文は、博士論文としての水準に足りるオリジナリティと学術的価値を十分に有していると判断する。

3. 判定

以上のような審査の結果を基に、本論文は博士（国際開発学）の学位に値するものと判定する。